

ラオスにおける初等教育の地域間格差 - SVAの学校建設事業から見たラオスの現状 -

櫻井亜沙子

はじめに

ラオスにおける教育の問題

ラオスにおける学校教育は、就学前教育（幼稚園など）、初等教育（小学校）、中等教育（中学校・高校）、高等教育（大学など）の4段階に分かれる。小学校5年、中学校3年、高校3年の5・3・3制をとっており、大学は専門により2~7年の幅がある。

該当年齢は就学前教育の保育園が0-2歳、幼稚園が3-5歳、初等教育が6-10歳、中等教育が11-16歳、高等教育が16歳以上である。

2000年における各教育段階の純就学率は、就学前教育8%、初等教育77.3%、中等教育38%、高等教育2.9%であった。学費は公立に限り、基本的に無料となっている。

ラオスにおいて1975年、1986年と教育政策に変化が起きて来たが、第3段階は1999年にタイで行われた「万人のための教育会議」に参加してからである。初等教育は唯一の義務教育で、政府が最も尽力している分野である。同年にはヴィエンチャンで国民教育会議が開かれ、初等教育の普遍化、識字人口の拡大、特に少数民族、女性、ハンディキャップを持つ人に対し、教育機会の拡大の3点を改善点として提案した。同年に5年ごとの教育目標が立てられた。1991年~95年の期間設定をし、下記のような7つの具体的な目標をあげた。

- 1, 初等教育の粗就学率を10%引き上げる（特に山岳地帯）
- 2, 初等教育における留年や中途退学者を減らし、修了率を60%に上げる
- 3, 非識字率を10%減少させ、全国の平均識字率を70%に引き上げる
- 4, 生徒の達成レベルを上昇させるため、学習環境や教師の労働環境を改善する
- 5, 親の教育への参加を高め、地域が教育を支持するために、特に少数民族に対して昼食や教科書の支給を行うことで教育への負担を減らす
- 6, 留年を防ぐため、少なくとも初等教育の3年間は自動進級制にする
- 7, 生徒の欠席を防ぐために、学校において栄養プログラムやヘルスケアサービスを提供し、水道や衛生施設を設置する

(UNESCO Principal Regional Office for Asia and the Pacific 1992. pp21-22)

しかし、以上の目標への評価は低く、改善されているとは言えない状況である。教育予算の不平等分配（一部の富裕層の中等、高等教育のために使われる）、地方と都市の教育格差の存在、男女間の教育格差の存在など、新たな問題が指摘されており、問題は山積みである。

初等教育のカリキュラム

カリキュラムは国立教育科学研究所（NRIES; National Research Institute for Education Science）が起草し，教育省管轄のカリキュラム委員会が精査し，必要に応じて修正のうえ採択する。

初等教育のカリキュラムは 7 教科から成り立っており，ラオス語，算数及び理科，社会の合科教育である「私たちの身の回り」の 3 教科が主な教科となっている。

教科目	1	2	3	4	5	計
ラオス語	12	10	8	6	6	42
算数	3	4	5	5	6	23
私たちの身の回り	2	2	2	3	3	12
芸術	2	2	2	2	2	10
体育	2	2	2	2	2	10
音楽	1	2	2	2	2	9
工芸	1	2	2	2	2	9
計	23	24	23	22	23	115

表 1，ラオス初等教育のカリキュラム（1994 年作成，98 年改訂）

問題と目的

以上のようにラオスは様々な教育の問題を抱えており，それを解決するには長い時間をかけて一つ一つ問題と向き合っていかなければならない。特に多民族国家であるラオスでは都市と地方の初等教育の格差が激しいことに着目し，実際に国際協力 NGO シャンティ国際ボランティア会（以下 SVA）ラオス事務所が学校建設などの支援を行っている地方の小学校に同行し，その現状を調査した。その状況を踏まえてラオスの教育問題の問題点と改善策を自分なりに考えることにした。

調査対象

ラオス国内の小中学校 計 10 校

（ヴィエンチャン市の小学校 2 校 ポリカムサイ県の小学校 2 校 ポリカムサイ県の中学校 1 校 サラワン県の小学校 5 校）

調査方法

今回，SVA の学校建設事業の現地調査に同行させてもらった。SVA が支援した，または支援する予定のヴィエンチャン県，ポリカムサイ県，サラワン県の小学校計 8 校を訪れ，

学校ごとにどのような問題があるのか、教員や児童、村民に聞き取り調査し、学校を取り巻くコミュニティの環境や地方の初等教育の現状を記録していった。また、ヴィエンチャン市内の小学校を1校で教員と児童に聞き取り調査を行い、地方と都市の小学校の教育状況を比較した。

調査結果

【ヴィエンチャン市内 ヴンカム小学校】

状態

1998年に寄贈され完成した 白ありの被害によって再び建設した小学校の建設後モニタリング、フォローアップ

学年	全体	女子
1 - 1	21	9
1 - 2	21	8
1 - 3	20	8
2 - 1	27	12
2 - 2	27	13
3	25	12
4	27	12
5	29	17
計	197	91

表2、ヴンカム小学校生徒数

教員数 全体9名、女子7名

特徴

SVAに寄せられた寄付によって建てられた小学校。生徒数が多く、4年生は古い竹作りの校舎で授業を受けていた。教員は1クラスに1人付いており、完全校であった。小学校の隣には中学校の建物が隣接していた。

教科書は1人の生徒につきラオス語、算数、理科社会の合科の3冊ずつ持っていた。図書室はなく、教室にも本は一冊もなかった。

生徒は礼儀正しく、「サバイディー」と挨拶すると笑顔で返してくれた。

問題点

恵まれた教育環境にはあるが、子どもが教科書以外の本に触れる機会が少ないと感じた。

学級文庫のような小規模なものでもいいので、教員が子どものために文字に触れさせる機会を作ってあげる努力が必要なのではないかと感じた。

【ボリカムサイ県タボック郡 ホワイルック小学校】

状態

学校建設の申請をしている。校舎はコンクリート作りだが、老朽化が激しい。幼稚園と1、2年生の建物、3 - 5年生の建物が二つあった。3 - 5年生の建物には教員が会議などをするオフィスが設けられていた。2つの建物にはさまれるように別の地域から来ている教員のために寮が建てられていた。

学年	全体	女子
幼稚園	22	不明
1	22	9
2	21	10
3	32	10
4 - 1	28	不明
4 - 2	29	不明
5 - 1	23	15
5 - 2	20	10
計	197	

表 3, ホワイルック小学校生徒数

学校の特徴

教員の数は数えられなかったが、ある女性の教員は自分の子どもを片手に抱えながら授業を行っていた。他に代わる教員がいないため、十分に育児休暇も取れない状況にある。校舎には図書室もトイレも設置されていない。しかし、地方では珍しく就学前教育を行っている。4年生を教える教員の月給を聞いたところ、50000kip（約5 USD）であった。低所得だが、他に働き口もなく、村民に頼りにされているため教員の職を離れられない。小学校を卒業したのみ学歴を持つ教員が多い。

地域の特徴

事前調査ということでSVAではその村のデータを集め、本当に支援が必要なのかを精査しなければならない。村の教育を底上げするためにSVAは村民にPPA(Pupils Parent Association)という日本のPTAのような保護者の団体を組織するように指示している。

村民は主に雨季は農業を営み、乾季は都市部で出稼ぎをして生計を立てている。村全体の平均所得は約270,000kipと、比較的ヴィエンチャンに近いが平均所得は地方と変わらない。夫が出稼ぎに行くと家に男手がない家庭も多い。36の家庭が3食十分な食事をできないでいる。村の近くに病院があるため衛生面での駆け込み寺は一応存在している。村に井

戸が3つ存在し、子ども達の多くは水汲みなどの手伝いをする。

この地域では教材を地域で共有するスクールクラスター制度をとっているが、15校ある学校のうち、4校しか完全校はない。ホワイルック小学校は数少ない完全校であるため支援の必要性は十分に感じる。ここに小学校を建てて継続的に使うかどうかを調べるために0歳からの子どもの数を聞く。この地域には0-3歳の子どもが47人、4-5歳が46人、6-10歳が103人、11-14歳が117人いることがわかった。

問題点

村全体の経済水準が低く、教育のために経済的な負担ができないようだ。子育てをしながら授業を行うというのは日本社会では考えられないことである。そのような教員には育児休暇を設け、せめて代替りの教員を雇うぐらいの経済力が地域にあればいいのだが、現実的には難しいのであろう。

また、ヴィエンチャンから離れた地方と経済水準は変わらないにも関わらず、NGOの支援がほとんど入ってきていなかった。NGOや海外政府は都市部から遠く離れた地域に目が行きがちで、その間の地域は支援の死角になっている。政府による村の状況調査は難しく、その県や郡の教育局が直接NGOに支援を申請しなければ、支援は始まらないという状況である。多くのNGOや海外政府の支援に頼っているラオスにおいて、自国の情報を詳細に収集することが求められる。

【ボリカムサイ県タボック郡 ホワイルック中学校】

状態

小学校とは離れた場所にあり、以前病院だった建物を学校として使っていた。生徒数が多く、病院だった建物以外に竹作りの部屋が隣接していた。2年生はその大きな竹作りの部屋を教室にしているため、人数が多いにも関わらずクラスが分かれていなかった。

学年	全体	女子
1 - 1	25	12
1 - 2	25	12
2	55	26
3 - 1	25	12
3 - 2	25	10
計	155	72

表4、ホワイルック中学校生徒数

学校の特徴

若い教員が音楽の授業を行っていた。日本とは異なり、音楽室などは存在しないため大きな音で楽器を鳴らしていた。隣の教室でも授業を行っていたが、楽器の音が授業の妨げになっているようだった。また、授業内容も小学校で行うような稚拙な内容であったよう

に思う。本来は小学校のカリキュラムに音楽も組み込まれているが小学校で音楽の授業ができないため中学で初めて音楽の授業を行っているようだった。

今回訪れた中学校で将来教員になるために教員養成学校に通っているという高校生に話を聞くことができた。ラオスでは中学から教員養成の学校に通うことができる（教育省の取り決めでは中学卒業後からだが、彼らは中学から通えると言っていた）。ほとんどの脅威になりたい学生は中学を卒業したあとに教員養成学校に通うという。

「なぜ教員になりたいのか？」と聞くと「ラオスには教員が足りない。学校に行ける子どもも少ない。国の発展のために少しでも多くの子どもの勉強を教えたい。」という内容の回答がほとんどだった。彼らは毎週 1 回遠く離れたヴィエンチャン市内にある教員養成学校に通い、訓練を受けている。

問題点

校舎が元病院だったため、学校用の作りになっておらず、それぞれの学年にかろうじて教室を用意しているだけだった。より専門的なことを学ばなければならない中学校においては設備が不足すぎている。もちろん図書館や音楽室はない。学校建設の必要性を感じた。また、本来は専門科目のみを教えるはずの中学校教員が、教員不足のため、全ての教科を教えなければならず教える内容の限界を感じた。教員になるために教員養成学校に通う学生は多いが、都市部に留まり地方には帰ってこない者も多い。地方の教員不足はラオス全体の教育水準の底上げに不可欠であり、早急に整備しなければならない課題である。

【ボリカムサイ県タボック郡 ナーカム小学校】

状態

完成後のモニタリング、フォローアップ。完成して間もない小学校。完全校であり、各学年 1 教室とミーティングルームと図書室が一緒になった部屋がある。生徒は礼儀正しく、挨拶をきちんとできる。教室内やミーティングルームは清潔に保たれている。

学年	全体	女子
1	19	11
2	19	7
3	17	8
4	22	11
5	24	13
計	101	50

表 5、ナーカム小学校生徒数

教師数 6 + 1 人 1 人は他の地域から来ている教員

特徴

校舎が完成してからは教員と生徒が喜んで登校するようになったと教員達は嬉しそうに話していた。完成してからはこの地域のモデル校に指定されている。校舎を清潔に保つため、教員が生徒に午前、昼休み、下校時に教室の掃除をするように指示している。30人ほどのPPAは結束が固く、毎月学校に集まり問題がないか話し合っている。図書室にはNGOから寄贈された本が約500冊ある。しかし、アメリカ系NGOのRoom to Readから寄贈された本はすべて英語のまま、ラオス語に翻訳されておらず読まれないまま図書室に置いてあった。アメリカに限らず、その国の事情を考えないまま支援してくるNGOも多いようだ。

問題点

PPAが組織としてしっかりしていることもあり、PPAが自ら学校の問題点を挙げていた。PPAからの問題点としては教材など物質的な不足のため、教員が集まって授業で使う教材を作っている。もっと教材や本を増やしたいと話していた。また、校舎内に電気はなく、ファンも付いていないため雨季は暗く授業中に黒板などが見えにくいこと、乾季は暑くて生徒が授業に集中できないことなどが挙げられた。図書室にはPPAが自ら引いた蛍光灯が取り付けられていた。教室にも電気を引けるようにしたいと話していた。

この学校は教員や保護者が学校づくりのために努力しているのが覗えた。不足な箇所は村の人が協力して解決して行こうという気持ちはその地域の教育の底上げのためには欠かせない要素だと感じた。ラオスでは支援してくれる海外政府やNGOが多いため、地域住民だけではなく、政府もそのような外部組織に頼りがちになってしまう。ナーカム小学校を好例として、地域全体が協力して教育状況を改善する努力をすべきであろう。

- 補足 -

ボリカムサイ県からラオス南部のサラワン県に移動した。



サラワン県に来て気づいたこと

サラワン県はラオス南部に位置し、畑や田んぼの広がる牧歌的雰囲気漂う地域である。しかし、ラオス国内では「サラワンには悪霊がいる」と言い伝えられ、ヴィエンチャンなどの都市部に住む人は行きたがらない場所である。都市部やルアンプラバンなどとは異なり、観光客の姿を見かけなくなる。

サラワンに到着後、ゲストハウスの周辺を散歩しているとたくさんの子どもが遊ぶ広場を見つけ、話しかけた。20人はおり、皆興味津々で近寄ってくる。サラワンに来る外国人と言えば政府かNGO関係者であるため、珍しいのであろう。

女の子はゴムとびなどで遊び大人しかたが、男の子は人が立っている場所に自転車で突進してきたり、私たちに質問するときには声を荒げて同じことを何度も聞くなど、コミュニケーションが全く成り立たなかった。「日本人だ」と言うと「お金をよこせ」とさらに強い口調で喚く。食べるものや着るものには困っている様子はなかったが、何をしたらよく、何をしたら悪いのかが理解できていない様子であった。そのような教育は大人が教えるものであるが、サラワンの大人たちはそれができないのだろう。教育は支援してすぐに結果が出るものではないが、時間をかけて着実に教育状況を改善することが必要だと感じた。

【サラワン県ワピー郡 ソリニャ小学校】

状態

2007年にSVAの支援によって建てられた。この地域のスクールクラスター中心校で、小学5年生までである完全校である。ワピー郡では18村中の15校がスクールクラスター制度を採用している。訪問した日は多くの本がこの学校に届けられた。この学校の隣には政府機関のEducational Resource Center（以下ERC）が設置され、この地域の教育管理を担っている。

学年	全体	女子
1	61	26
2	49	20
3	48	29
4	72	37
5	68	34
計	298	146

表6、ソリニャ小学校生徒数

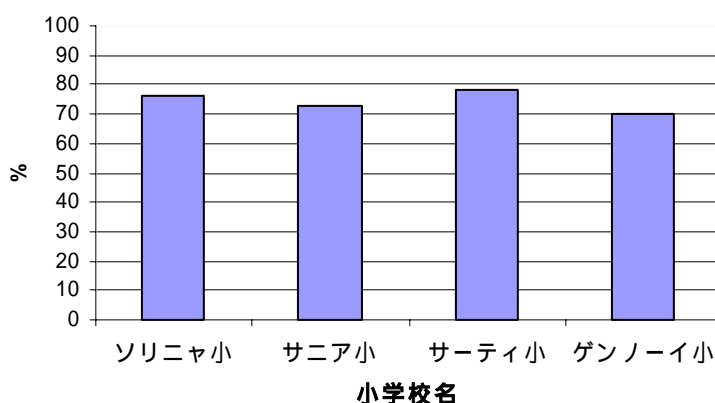
特徴

この地域の不完全校からソリニャ小学校まで通う生徒が多い。特に3年生までしかない学校が多いため、4年生からの生徒数が急増していることがわかる。しかし、15校ある小学校の内、高学年に上がる生徒は少なく、その理由としては成長に伴い、家庭での労働

力となるため、親が学校には行かせず家で仕事をする。特に雨季は農業の季節なので、学校に来る生徒が減る。また、18村もあるため、ソリニャ小学校まで遠くて通えない生徒が多い。雨季には通れそうにない道が続き、生徒は通学を諦めてしまうようだ。

スクールクラスター制度採用校の生徒進級率

Table1.生徒進級率



この結果は2006 - 2007年のもので、1 - 5年生まで試験に合格し、進級できた生徒の数をパーセンテージで示している。4校併せた生徒数は1660人であった。小学校は全15校あるが、完全校の中に不完全校を含んだ数で計算している。この結果のみを見ると4校全てが約70%という比較的高い進級率を示しているが、不完全校の生徒の進級率は低くなっている。

また、この学校はERCが管理していることもあり、他の小学校と比較すると様々な情報が集まっていた。その中で注目したのは、教員の学歴と収入である。

就学年数	教員養成年数	人数	女性
5		2	1
5	3	14	7
5	4	12	5
8	3	28	16
11	1	6	5

表7. 教員の学歴

中学を卒業してから教員になった人が多く、続いて小学校を卒業したのみの人が多かった。この地域には高校が少ないため高校まで卒業できる人は少ないのだろう。大学まで卒業した人は皆無で、ラオス国立大学の教育学部を卒業したような教員は地方で教員にな

ることはほとんどない。

収入は学歴により異なり，高校を卒業し，1年の教員養成訓練を受けた教員の月給は692530kipと最高であった。小学校を卒業したのみの教員でも月に490000kip政府から給料としてもらっている。恵まれた状況にあると思う一方で，毎月給料が支払われるわけではなく，年に2,3回に分けてもらうことが一般的なようだ。しかし，ボリカムサイ県の教員と比較すると10倍以上の収入を得ていることがわかる。この違いはどこからくるのだろうか。

【サラワン県ラオンガム郡 サヌムナ小学校】

状態

2007年10月から建設を開始しており，建設途中。60%程完成していた。1年生までの不完全校であり，教員1人。新しく出来る学校に教室は3教室作られていた。実質的に1学年しかおらず，下記の表にある2-5年生は違う村の小学校に通っている。この地域は22村17校でスクールクラスター制度を採用している。ラオルム族とスワイ族などの生徒が混在しているが，生徒は皆ラオス語が理解できる。この日は教員達の会議があり，また女性の日のお祝いのため学校が休みであった。建設中の学校の前で子ども達が数人遊んでいた。

学年	全体	女子
1	32	18
2	25	17
3	20	9
4	12	8
5	5	2
計	97	54

表8，サヌムナ小学校生徒数

学校の特徴

学校に生徒や教員はいなかったが，村民に話を聞くことができた。サヌムナ小の教員は小学校しか卒業しておらず，教員養成学校で訓練は受けていない。SVAが教員養成のため，過去2回ワークショップを開いたとき，この学校の教員も参加していた。給料は現金でもらえず，村民が米や野菜を持ち寄り，年に1回それを給料の代わりとして教員に渡ししている。

村の特徴

ほとんどの村民は米や野菜を作ったり，牛を飼って生活している。59家族中約32家族は農業を営んでいるが，他の20家族は田を持っていないため，野菜を作るなどして暮らしている。49家族は1年中米を食べることができるが3家族に限っては4-5月分の米しかない。

村にある家族の平均年収は約 150000kip と極端に低い。1 家族につき平均 10 人いるため、現金に頼らない自給自足の生活をしている。

村の子どもは制度上は 6 歳から 10 歳まで学校に通うことになっているが、その後進学する生徒はほとんどいない。その理由として、学校に行かせるための経済的余裕がない、家で家事や弟妹の面倒を見なければならない、家から完全校までが遠いなどが挙げられた。

問題点

学校建設現場で遊んでいた 4,5 人の子どもに挨拶をしたが、都市部の子どものように挨拶を返すことなくじっとこちらの様子を覗いていた。髪も洋服も汚れており、下着も着けていない。中には裸の子どもがいた。村は日用品のような基本的なマテリアルさえ揃えられない経済状況にある。もちろん子ども達は学校で使う教科書やノートを持っていない。毎週金曜に教員が会議を開くようだが、基本的な解決のために何を話し合っているのか疑問を持ってしまう。生活に必要な最低限の物もない村において、教育に力を入れることは非常に困難である。まずは経済水準を上げることから考える必要があるだろう。

また、ワピー郡とはそれほど離れていない地域であるにも関わらず非常に大きな地域間格差を感じた。政府の方針としては、教員養成学校において資格を得たものに対し、給料を支払っているようだ。しかし、教員養成学校にも通えない地域に新たに教員を派遣するのは難しい。教員を目指す全ての人が教員養成学校に通い、現金収入を得られるように教育制度を整備する必要があると感じた。

【サラワン県ラオンガム郡 テメポブーン小学校】

状態

1 学年しかない不完全校。SVA に学校建設支援が決定している。壁のない竹作りの校舎に机と椅子が所狭しと並べられていた。2 年生からは同じスクールクラスターの地域にある中心校のワンプアーイ小学校に通う。

学年	全体	女子
1	65	25

表 9、デメポブーン小学校生徒数

特徴

オーストラリアの NGO によって校舎より先にトイレと井戸が完成していた。しかし、トイレに行く習慣がない子どもにとってトイレの習慣を教えることから始めなくてはならない。完成したが使用されない可能性もある。

2 年生からはワンプアーイ小に通うことになっているが、実際に進級するのはわずか 1% の生徒に過ぎないという。その原因として、試験に合格してもワンプアーイ小まで遠すぎて通えない、家に経済的余裕がないなど、サナムナ小と不登校の理由は同じであった。

授業は教科書を使わず、教員が黒板に書いたものを読むだけであり、この小学校でも教員への給料は米で支払われていた。SVAのワークショップには参加したようだ。

現在の建物は村民が協力して資材を集め、年に1回建替えを行っている。壁がないため、雨季は雨を避けられず、乾季は直射日光があたる。

問題点

学年が1つしかないため、毎年教員が教える内容は同じであり、生徒は学校に来なくなる。1つしかない学年のために学校を建設するのは果たして有用なのだろうか。ボリカムサイ県の小中学校のように完全校であっても支援されない学校がある中で、1学年のためだけに建設するのは将来的にその地域が学校を維持できるのかという懸念がある。しかし、このデメポブーン村の子ども達が学校に通えないのは不平等と言えるであろう。

【ボンヌアン小学校】

ここでも教員の会議が行われているため、学校は休みであった。近所にいた村民にインタビューをしたが、デメポブーン小学校と条件はあまり変わらなかったため、割愛する。

上記のボリカムサイ、サラワン両県の小学校と比較するため、ヴィエンチャン市内の小学校で聞き取り調査を行ってきた。

【ヴィエンチャン特別市 ミーサイ小学校】

状態

ヴィエンチャン市内の寺院ワットミーサイの敷地内にある小学校。完全校で生徒数が多い。建物は新しくはないが、設備が整っており、ハード面では特に大きな問題はないように見える。教員は1クラスに1人付いており教員不足の心配はなさそうである。

学年	全体	女子
幼稚園	26	13
1	34	12
2	40	28
3	36	14
4	28	10
5	26	13
計	190	90

表 10, ミーサイ小学校生徒数

教員数 6+1人 一人は英語の授業の専任教師で、英語の時間のみ教えに来ている。

特徴

ヴィエンチャン市の中心部にある小学校というだけあり、十分すぎるほどの環境が整備

されていた。朝は校庭で体操を行い、授業の前には仏教のお祈りをするのが習慣。生徒は挨拶ができ、ごみは遠くにあってもゴミ箱に入れるよう躰けられている。

教室には日本の小学校と変わらぬ机と椅子が全員に用意され、教科書はラオス語、算数、理科と社会が合科された 3 冊全員が持っていた。壁にはラオス語の文字表と、英語のアルファベット表、子どもの描いた色とりどりの絵が飾られていた。朝は授業の前に宿題を集め、寺院のお祭りのための集金がされていた。

教室以外の設備として、音楽室、コンピューター室、調理室、工芸室、職員室がそれぞれ独立した部屋を持っていた。

4 年生の歴史の授業を見学させてもらった。教科書を片手に教師が黒板に重要事項を書き出し、生徒がそれを教科書を見ながらノートに書き写すという、日本の授業風景と大差ないものだった。休み時間には近くの売店で子ども達がおやつを買って食べたり、図書室で本を読んだりしていた。図書室の蔵書は 500 冊以上あった。中には日本の NGO が寄贈したものがあつた。英語を勉強したい生徒のためか、英語とラオス語両方で書かれた本が何冊かあつた。

4 年生の教員に月給を覗いたところ、500000kip で、政府からもらっているとのことだった。生徒の中には 15 歳で 5 年生だという子もおり、地方とは異なる事情で進級できない生徒がいるようだった。

ミーサイ小学校を見学した感想

問題点は特になく、ラオス国内では最も環境の整った小学校の一つではないかという印象を受けた。生徒の中には携帯電話を所有しているのも珍しくなく、朝は親がバイクで送り迎えしていた。政府から支給される補助金のほかに生徒から集金をするなどして学校に必要なものを買って揃えているようだった。これほどまで地域間で差があるとは予想しておらず、ラオスの教育格差の深刻さを知った。元ワットミーサイの僧侶だった男性教員もラオスは地方と都市の教育格差がありすぎることをラオスの問題だと話していた。

ラオスにおける教育の問題点のまとめ

計 10 校を比較したが、それぞれの小学校にハード、ソフト面両方の問題が多くあることを現実として確かめることができた。始めに書いたラオスの教育政策は国民の教育に反映しているのか疑ってしまう。特に深刻な問題として、

学校に十分な設備が行き届いていないこと

教員の不足、教員としての能力の欠如

生徒の進級と通学が困難なこと

家庭の経済水準が低く、子どもに十分な教育を受けさせてあげられないこと

以上の 4 点が考えられる。他にも民族間の教育格差などが問題となっているが、今回のフィールドワークでは確認することができない問題だったので以上の問題点を考察してい

きたい。

考察

物質的にラオスの学校ではまだまだ教材が足りていないことが今回のフィールドワークで明らかになった。校舎を建設すれば、次のハードの問題として教科書の不足が挙げられる。特に地方の小学校では家庭に教科書を買う経済的余裕さえないため、何人かで一緒に見るか、まったく教科書を使わずに授業を行っていた。社会主義国ということもあり、教科書は政府の印刷局しか発行することができない。民間の出版社もほとんど存在せず、国際NGOや国際機関の支援に頼らざるをえない状況である。SVAラオス事務所の2006年の報告によるとサラワン県のワンプアイ小学校では1年生106人に対して3教科の教科書が1冊ずつしか所有していなかった。

様々な国際協力機関が教科書支援を行っているが、ラオス政府が各小学校に配布できるのが最もラオスのためにはよい。(国自体に予算が不足しているため、現段階では不可能ではあるが。)スクールクラスターを利用し、本を地域で共有することは今後も重要な教材源になっていくであろう。しかし、国にばかり頼るのではなく、学校自身の努力が直接的に教育に反映する。あるラオス国内の小学校では教員が様々なNGOに呼びかけて本を集め、本棚も自分たちで作って本を保管している。少しでも多くの知識を子どもに吸収してもらいたいという教員の思いが多く国際協力機関の支援に繋がっている。政府に頼れない状況の中で、教員や保護者の自発的な取り組みが教育状況の改善に結びつく。小学校に教材の重要性を気づかせ、学校自身もそれに応えていく相互努力が必要であろう。

教員の不足については今回訪問した殆どの小学校で確認することができた。ホワイリック小学校では幼い子供を片手に授業を行っていた。そのような小学校は他にもたくさんあるだろう。育児休暇を取れるようだが、代わりに授業ができる教員がいないためやむを得ず授業をしている。このような状況を打開するために教員の増加、教育制度の整備を地域ごとで行っていくことが重要になる。給料も地域でのばらつきがあるため、ラオス人にとって教員はいい職業とは言いがたいのが現状である。職業として社会的に認められるためには、整った設備の下で安定した収入が得られるような環境作りが最優先課題となる。

サラワン県に行き、生徒の通学が困難なことがわかった。国道を外れた道なき道の果てに小学校がある。これでは体の小さなラオスの子供は通えるはずがない。交通の整備、スクールバスを用意するなど、インフラの整備も課題が多い。インフラのようなハードの側面は他国や、NGOの支援を

経済状況が悪くても、学校に行って勉強すれば子供に明るい未来が待っていることがわかれば、親もなんとかして学校に行かせるだろう。しかし、ラオスには学校を卒業した後の子供の受け皿がない。そのことを親は知っているため学校は何の役にも立たないと思ってしまうという根の深い問題でもある。米や野菜で教員の給料を払うのにも問題がある。きちんとした賃金を払える政府の財政改善はもちろん誰もが望むことだが、支援で教員の

給料を払うことはできない。支援とは何なのか、本当にラオスのためになるのかと考えさせられた。